

委託契約書（案）

支出負担行為担当官 関東森林管理局長 松村 孝典 （以下「委託者」という。）と
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇（以下「受託者」という。）は、令和7年度三国地区外有害鳥獣（二ホンジカ）誘引捕獲等委託事業の委託事業について、次のとおり委託契約を締結する。

（実施する委託事業）

第1条 委託者は、次の委託事業（以下「委託事業」という。）の実施を受託者に委託し、受託者は、その成果を委託者に報告するものとする。

（1）委託事業名

令和7年度三国地区外有害鳥獣（二ホンジカ）誘引捕獲等委託事業

（2）委託事業の内容

別添「国有林野における有害鳥獣捕獲等事業の実施に係る共通仕様書（関東森林管理局版）」及び「特記仕様書」のとおり

（3）履行期限

契約締結日の翌日から令和8年2月27日

（委託事業の遂行）

第2条 受託者は、契約締結後14日（休日等を含む。）以内に委託事業計画書（別紙様式1）を提出するものとし、記載された計画に従って実施しなければならない。

（委託費の限度額）

第3条 委託者は、委託事業に要する費用（以下「委託費」という。）として、金〇〇〇〇円（うち消費税及び地方消費税の額〇〇〇〇円）を超えない範囲内で受託者に支払うものとする。

（注）「消費税及び地方消費税の額」は、消費税法（昭和63年法律第108号）第28条第1項及び第29条並びに地方税法（昭和25年法律第226号）第72条の82及び第72条の83の規定により算出したもので、委託費の限度額に100分の10を乗じて得た金額である。

2 受託者は、委託費を別添の委託事業計画書に記載された費目の区分に従って使用しなければならない。当該計画が変更されたときも同様とする。

（契約保証金）

第4条 会計法（昭和22年法律第35号）第29条の9第1項に規定する契約保証金の納付は、予算決算及び会計令（昭和22年勅令第165号）第100条の3第3号の規定により免除する。

(事業管理責任者)

第5条 受託者は、契約締結後14日以内(土日等を含む)に本契約に係る事業責任者を選任し、委託者に通知しなければならない。なお、次に掲げる各号の条件を満たしていること。

- (1) 受託者が直接雇用する者であること
- (2) 本契約における捕獲手法に応じた狩猟免許を有していること
- (3) 救急救命講習を受講していること
- (4) 認定鳥獣捕獲事業者講習の安全管理講習および技能知識講習もしくは当該講習と同等の講習を修了していること

(事業計画書)

第6条 受託者は、契約締結後14日以内(土日等を含む)に委託事業計画書(別紙様式1～4)を作成し、監督職員を経由し委託者の承認を得なければならない。

なお、事業計画書には次の事項についての記載及び関係書類を添付すること。

- (1) 共通仕様書1.10(2)に掲げる事項
- (2) 共通仕様書2.4.1に掲げる狩猟免許等の写し及び捕獲個体の処理方法

(再委託の制限及び承認手続き)

第7条 受託者は、委託事業の全部を一括して、又は主たる部分を第三者に委任し、又は請け負わせてはならない。

- 2 受託者は、この委託事業達成のため、委託事業の一部を第三者に委任し、又は請け負わせること(以下「再委託」という。)を必要とするときは、あらかじめ委託者の承認を得なければならない。ただし、再委託が出来る事業は、原則として委託費の限度額に占める再委託の金額の割合(「再委託比率」という。以下同じ。)が50パーセント以内の業務とする。
- 3 受託者は、前項の再委託の承認を受けようとするときは、当該第三者の氏名又は名称、住所、再委託を行う業務の範囲、再委託の必要性及び契約金額について記載した再委託承認申請書(別紙様式8)を委託者に提出しなければならない。
- 4 受託者は、前項の書面に記載した事項を変更しようとするときは、あらかじめ委託者の承認を得なければならない。
- 5 再委託する業務が委託業務を行う上で発生する事務的業務であって、再委託比率が50パーセント以内であり、かつ、再委託する金額が100万円以下である場合には、軽微な再委託として第2項から前項までの規定は、適用しない。
- 6 受託者は、再委託する場合には、当該委託にかかる再委託先の行為について、委託者に対し、すべての責任を負うものとする。
- 7 再委託者が当該事業の実施能力を有しており、指名停止期間中でないこと。

(監督職員)

第8条 委託者は、本事業における適正な履行を確保するために監督職員を定め、受託者に通知するものとする。

- 2 監督職員は、契約図書に定められた事項の範囲内において、指示、承諾、協議等の職務を行うものとする。

- 3 監督職員は、監督職員がその権限を行使するときは、書面により行うものとする。ただし、緊急を要する場合、監督職員が受託者に対し口頭による指示等を行った場合には、受託者はその口頭による指示等に従うものとする。なお監督職員は、その口頭による指示等を行った後7日以内に書面で受託者に通知するものとする。

(実績報告)

第9条 受託者は、委託事業が終了したとき（委託事業を中止し、又は廃止したときを含む。）は、委託事業の成果を記載した委託事業実績報告書（別紙様式11～12）とともに業務日誌（別紙様式13）及び記録写真等の成果物を委託者に提出しなければならない。

(検査)

第10条 委託者は、前条に規定する実績報告書の提出を受けたときは、これを受理した日から10日以内の日（当該期間の末日が休日（行政機関の休日に関する法律（昭和63年法律第91号）第1条第1項各号に掲げる日をいう。）に当たるときは、当該末日の翌日を当該期間の末日とする。次項において同じ。）又は当該委託事業の履行期限の末日の属する年度の3月31日のいずれか早い日までに、当該委託事業が契約の内容に適合するものであるかどうかを当該実績報告書及びその他関係書類又は実地より検査を行うものとする。

- 2 委託者が前項に規定する検査により当該委託事業の内容の全部又は一部が本契約に違反し又は不当であることを発見したときは、委託者は、その是正又は改善を求めることができる。この場合においては、委託者が受託者から是正又は改善した給付を終了した旨の通知を受理した日から10日以内に、当該委託事業が契約の内容に適合するものであるかどうか再度検査を行うものとする。

(委託費の額の確定)

第11条 委託者は、前条に規定する検査の結果、当該委託事業が契約の内容に適合すると認めるときは、委託費の額を確定し、受託者に対して通知するものとする。

- 2 前項の委託費の確定額は、委託事業に要した経費の実支出額と第3条第1項に規定する委託費の限度額のいずれか低い額とする。

(委託費の支払)

第12条 委託者は、前条の規定により委託費の額を確定し受託者に通知した後、受託者からの適法な精算払請求書（別紙様式16）を受理した日から30日以内にその支払を行うものとする。

(契約の変更等)

第13条 委託事業の実施に当たり、仕様書等（図面、仕様書、質問回答書をいう。以下同じ。）に誤謬等があることを発見した場合又は仕様書等に示された実施条件と実際の事業現場が一致しない場合或いは仕様書等に記載されていない実施条件について予期することのできない特別な状態が生じた場合は、その取扱いについて委託者と受託者とが協議して定めるものとする。

- 2 前項の規定に基づき仕様書等を変更した場合において、委託者は、必要があると認めるときは履行期限又は委託費を変更するものとする。
- 3 前項の規定のほか、天候不良、関連事業の調整への協力その他受託者の責に帰すことができない事由により履行期間内に委託事業を完了することができない事態が生じた場合は、委託者と受託者とが協議の上、履行期限を変更することができる。
なお、委託者が変更事由が生じた日から7日以内に協議開始の日を通知しない場合には、受託者は協議開始の日を定め委託者に通知することができる。
- 4 委託費の変更については、委託者と受託者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から14日以内に協議が整わない場合は、委託者が定めた金額を受託者に書面により通知する。
- 5 本項に記載のない作業条件等の変更による契約変更については、共通仕様書 1.19「条件変更等」、1.20「契約変更」及び1.21「事業計画の変更」のとおりとする。

(委託事業の中止等)

第14条 受託者は、下記に挙げるやむを得ない事由により、委託事業の遂行が困難となったときは、委託事業計画中止（廃止）申請書（別紙様式6）を委託者に提出し、委託者と受託者とが協議の上、契約を解除し、又は契約の一部変更を行うものとする。

- (1) 第三者の土地への立ち入り許可が得られない場合
- (2) 関連する他の事業等の進捗が遅れたため、事業の続行を不相当と認めた場合
- (3) 環境問題等の発生により事業の継続が不相当又は不可能となった場合
- (4) 天災等により事業の対象箇所の状態が変動した場合
- (5) 第三者及びその財産、受託者、使用人等並びに監督職員の安全確保のため必要があると認めた場合
- (6) 前各号に掲げるもののほか、委託者が必要と認めた場合

- 2 前項の規定により契約を解除するときは、第9条から第12条の規定に準じ精算するものとする。

(計画変更の承認)

第15条 受託者は、前2条に規定する場合を除き、別添の委託事業計画書に記載された委託事業の内容又は経費の内訳を変更しようとするときは、委託事業計画変更承認申請書（別紙様式7）正副2部を委託者に提出し、その承認を受けなければならない。

ただし、委託事業計画書の支出の部の区分欄に掲げる各経費のそれぞれ30%以内の増減の場合については、この限りでない。

- 2 委託者は、前項の承認をするときは、条件を付すことができる。

(履行遅滞に係る損害金等)

第16条 受託者の責に帰すべき事由により履行期間内に委託事業を完了することができない場合は、委託者は、損害金の支払を、受託者に書面により請求することができる。

- 2 前項の損害金の額は、委託費に対し、遅延日数に応じ、年3パーセントの割合で計算した額とする。
- 3 委託者の責に帰すべき事由により第10条第1項の規定に基づく委託費の支払が遅れた場合においては、受託者は、当該委託費に対し、遅延日数に応じ、支払遅延防止法第8

条第1項の規定により決定された率を乗じて計算した額の遅延利息の支払を委託者に書面により請求することができる。

(契約の解除等)

第17条 委託者は、受託者がこの契約に違反した場合、又は正当な理由なく履行の全部又は一部が不能となることが明らかとなったときは、契約を解除し、又は変更し、及び既に支払った金額の全部又は一部の返還を受託者に請求することができる。

(属性要件に基づく契約解除)

第18条 委託者は、受託者が次の各号の一に該当すると認められるときは、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

- (1) 法人等（個人、法人又は団体をいう。）の役員等（個人である場合はその者、法人である場合は役員又は支店若しくは営業所（常時契約を締結する事務所をいう。）の代表者、団体である場合は代表者、理事等、その他経営に実質的に関与している者をいう。以下同じ。）が、暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ。）又は暴力団員（同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。）であるとき。
- (2) 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的、又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしているとき。
- (3) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与しているとき。
- (4) 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれを不当に利用するなどしているとき。
- (5) 役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有しているとき。

(行為要件に基づく契約解除)

第19条 委託者は、受託者が自ら又は第三者を利用して次の各号の一に該当する行為をした場合は、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

- (1) 暴力的な要求行為
- (2) 法的な責任を超えた不当な要求行為
- (3) 取引に関して脅迫的な言動をし、又は暴力を用いる行為
- (4) 偽計又は威力を用いて契約担当官等の業務を妨害する行為
- (5) その他前各号に準ずる行為

(談合等の不正行為に係る解除)

第20条 委託者は、この契約に関し、受託者が次の各号の一に該当するときは、契約の全部又は一部を解除することができる。

- (1) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「独占禁止法」という。）第7条又は第8条の2（同法第8条第1号又は第2号に該当する行為の場合に限る。）の規定による排除措置命令を行ったとき、同法第7条の2第1項（同法第8条の3において読み替えて準用する場合を含む。）の規定による課徴金納付命令を行ったとき又は同法

第7条の4第7項若しくは第7条の7第3項の規定による課徴金の納付を命じない旨の通知を行ったとき。

- (2) 受託者又は受託者の代理人（受託者又は受託者の代理人が法人にあっては、その役員又は使用人を含む。）が刑法（明治40年法律第45号）第96条の6若しくは第198条又は独占禁止法第89条第1項若しくは第95条第1項第1号の規定による刑の容疑により公訴を提起されたとき。

- 2 受託者は、この契約に関して、受託者又は受託者の代理人が前項各号に該当した場合には、速やかに、当該処分等に係る関係書類を委託者に提出しなければならない。

（再委託契約等に関する契約解除）

第21条 受託者は、契約後に再受託者等が解除対象者であることが判明したときは、直ちに当該再受託者等との契約を解除し、又は再受託者等に対し当該解除対象者（再受託者等）との契約を解除させるようにしなければならない。

- 2 委託者は、受託者が再受託者等が解除対象者であることを知りながら契約し、若しくは再受託者等の契約を承認したとき、又は正当な理由がないのに前項の規定に反して当該再受託者等との契約を解除せず、若しくは再受託者等に対し当該解除対象者（再受託者等）との契約を解除させるための措置を講じないときは、本契約を解除することができる。

（表明確約）

第22条 受託者は、第18条の各号及び第19条各号のいずれにも該当しないことを表明し、かつ、将来にわたっても該当しないことを確約する。

- 2 受託者は、第18条及び第19条各条の一に該当する行為を行った者（以下「解除対象者」という。）を再受託者等（再委託の相手方及び再委託の相手方が当該契約に関して個別に契約する場合の当該契約の相手方をいう。以下同じ。）としないことを確約する。

（違約金）

第23条 次の各号のいずれかに該当する場合には、委託者は受託者に対し、違約金として契約金額の100分の10に相当する額を請求することができる。

- (1) 前条の規定によりこの契約が解除された場合

- (2) 受託者がその債務の履行を拒否し、又は、受託者の責めに帰すべき事由によって受託者の債務について履行不能となった場合

2 次の各号に掲げる者がこの契約を解除した場合は、前項第二号に該当する場合とみなす。

- (1) 受託者について破産手続開始の決定があった場合において、破産法（平成16年法律第75号）の規定により選任された破産管財人

- (2) 受託者について更生手続開始の決定があった場合において、会社更生法（平成14年法律第154号）の規定により選任された管財人

- (3) 受託者について再生手続開始の決定があった場合において、民事再生法（平成11年法律第225号）の規定により選任された再生債務者等

- 3 委託者は、前条の規定によりこの契約を解除した場合、これにより受託者に生じる損害について、何ら賠償ないし補償することは要しないものとする。

(談合等の不正行為に係る違約金)

第24条 受託者は、この契約に関し、次の各号の一に該当するときは、委託者が前条により契約の全部又は一部を解除するか否かにかかわらず、契約金額の100分の10に相当する額を違約金として委託者が指定する期日までに支払わなければならない。

- (1) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して独占禁止法第7条又は第8条の2(同法第8条第1号又は第2号に該当する行為の場合に限る。)の規定による排除措置命令を行い、当該排除措置命令が確定したとき。
- (2) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して独占禁止法第7条の2第1項(同法第8条の3において読み替えて準用する場合を含む。)の規定による課徴金納付命令を行い、当該納付命令が確定したとき。
- (3) 公正取引委員会が、受託者又は受託者の代理人に対して独占禁止法第7条の4第7項又は第7条の7第3項の規定による課徴金の納付を命じない旨の通知を行ったとき。
- (4) 受託者又は受託者の代理人(受託者又は受託者の代理人が法人にあっては、その役員又は使用人を含む。)に係る刑法第96条の6若しくは第198条又は独占禁止法第89条第1項若しくは第95条第1項第1号の規定による刑が確定したとき。

2 受託者は、前項第4号に規定する場合に該当し、かつ次の各号のいずれかに該当するときは、前項の契約金額の100分の10に相当する額のほか、契約金額の100分の5に相当する額を違約金として委託者が指定する期日までに支払わなければならない。

- (1) 前項第2号に規定する確定した納付命令について、独占禁止法第7条の3第1項の規定の適用があるとき。
- (2) 前項第4号に規定する刑に係る確定判決において、受託者又は受託者の代理人(受託者又は受託者の代理人が法人にあっては、その役員又は使用人を含む。)が違反行為の首謀者であることが明らかになったとき。
- (3) 受託者が委託者に対し、独占禁止法に抵触する行為を行っていない旨の誓約書を提出しているとき。

3 受託者は、契約の履行を理由として、前2項の違約金を免れることができない。

4 第1項及び第2項の規定は、委託者に生じた実際の損害の額が違約金の額を超過する場合において、委託者がその超過分の損害につき賠償を請求することを妨げない。

(損害賠償)

第25条 委託者は、第18条、第19条、第20条及び第21条第2項の規定により本契約を解除した場合は、これにより受託者に生じた損害について、何ら賠償ないし補償することは要しない。

2 受託者は、受託者が第18条、第19条、第20条及び第21条第2項の規定により本契約を解除した場合において、委託者に損害が生じたときは、その損害を賠償するものと

する。

（不当介入に関する通報・報告）

第26条 受託者は、自ら又は再受託者等が、暴力団、暴力団員、社会運動・政治運動標ぼうゴロ等の反社会的勢力から不当要求又は業務妨害等の不当介入（以下「不当介入」という。）を受けた場合は、これを拒否し、又は再受託者等をして、これを拒否させるとともに、速やかに不当介入の事実を委託者に報告するとともに、警察への通報及び捜査上必要な協力を行うものとする。

（著作権等）

第27条 受託者は、委託事業により納入された著作物に係る一切の著作権（著作権法（昭和45年法律第48号）第27条及び第28条に規定する権利を含む。）を、著作物の引渡し時に委託者に無償で譲渡するものとし、委託者の行為について著作者人格権を行使しないものとする。

- 2 受託者は、第三者が権利を有する著作物を使用する場合は、原著作権等の著作権及び肖像権等の取扱いに厳重な注意を払い、当該著作物の使用に関して費用の負担を含む一切の手続きを行うものとする。
- 3 受託者は、委託者が著作物を活用する場合及び委託者が認めた場合において第三者に二次利用させる場合は、原著作権等の著作権及び肖像権等による新たな費用が発生しないように措置するものとする。それ以外の利用に当たっては、委託者は受託者と協議の上、その利用の取り決めをするものとする。
- 4 この契約に基づく作業に関し、第三者と著作権及び肖像権等に係る権利侵害の紛争等が生じた場合、当該紛争等の原因が専ら委託者の責めに帰す場合を除き、受託者は自らの責任と負担において一切の処理を行うものとする。この場合、委託者は係る紛争等の事実を知ったときは、受託者に通知し、必要な範囲で訴訟上の防衛を受託者に委ねる等の協力措置を講じるものとする。

（物品管理）

第28条 受託者は、委託者から貸与を受けた物品（以下貸与物品）や、委託費により購入した物品（以下調達物品）について、それを記録した物品管理簿（別紙様式14）を備え付け、常にその数量や状態を明らかにしておかなければならない。

- 2 受託者は委託者から物品の貸与を受ける場合は支給材料（貸与品）等調書（別紙様式5）を提出して借り受け、事業完了後速やかに支給材料（貸与品）等返納届（別紙様式15）を添えて返却しなければならない。
- 3 受託者は、調達物品について、委託事業により取得したものである旨の標示（別紙様式10）をするとともに、委託事業ごとに物品管理簿（別紙様式14）に登録しなければならない。この場合において、受託者は、物品管理簿の写しを委託事業実績報告書提出の際に併せて提出するものとする。
- 4 委託者は、委託事業終了後、委託事業により購入した物品について、その返還の要否を決定し、返還を要するものと指定した場合は、引渡日時、引渡場所等引渡しに必要な

事項を定め、その旨受託者に指示するものとする。ただし、受託者において、委託費により購入した物品を同種の事業で継続して使用したい場合は、継続使用申出書（別紙様式17）により申し出て委託者の承認を受けなければならない

- 5 受託者の貸与物品や調達物品の返却に要する費用は受託者の負担とする。
- 6 受託者は、貸与物品や調達物品を返還するに当たり、委託者が当該物品の使用・保管場所を決定するまでの間、無償で保管するものとする。
- 7 受託者は、貸与物品や調達物品の保全に努めることとするが、損傷等により使用できなくなった場合は、使用不能報告書（別紙様式9）により報告し、代品を納め若しくは原状に復して返還し、または返還に代えてその損害を賠償しなければならない。
- 8 委託事業終了後、委託費により購入した物品のうち返還を要しないものとして委託者が指定し受託者が売払処分等により収益を得た場合は、受託者は収益納付報告書（別紙様式18）により委託者に報告し、委託者から指示に従い収益を国庫に納付しなければならない。

（委託事業の調査）

第29条 委託者は、必要に応じ、受託者に対し、実績報告書における委託費の精算に係る審査時その他の場合において、委託事業の実施状況、委託費の使途その他必要な事項について所要の調査報告を求め、又は実地に調査することができるものとし、受託者はこれに応じなければならないものとする。

（帳簿等）

第30条 受託者は、各委託事業の委託費については、委託事業ごとに、帳簿を作成・整備した上で、受託者単独の事業又は国庫補助事業の経費とは別に、かつ、各委託事業の別に、それぞれ明確に区分して経理しなければならない。

- 2 受託者は、委託費に関する帳簿への委託費の収入支出の記録は、当該収入支出の都度、これを行うものとする。
- 3 受託者は、前項の帳簿及び委託事業実績報告書に記載する委託費の支払実績を証するための証拠書類又は証拠物（以下「証拠書類等」という。）を、受託者の文書管理規程等の保存期限の規定にかかわらず、当該委託事業終了の翌年度の4月1日から起算して5年間、整備・保管しなければならない。
- 4 受託者は、委託事業実績報告書の作成・提出に当たっては、帳簿及び証拠書類等と十分に照合した委託事業に要した経費を記載しなければならない。
- 5 受託者は、前各項の規定のいずれかに違反し又はその他不適切な委託費の経理を行ったと委託者が認めた場合には、当該違反等に係る委託費の交付を受けることができず、又は既にその交付を受けている場合には、委託者の指示に従い当該額を返還しなければならない。

（旅費及び賃金）

第31条 受託者は、委託費からの旅費及び賃金の支払については、いずれも各委託事業の実施

要領等に定める委託調査等の実施と直接関係ある出張又は用務に従事した場合に限るものとする。

- 2 受託者は、前項の規定に違反した不適切な委託費の経理を行ったと委託者が認めた場合には、当該違反等に係る委託費の交付を受けることができず、又は既にその交付を受けている場合には、委託者の指示に従い当該額を返還しなければならない。

（秘密の保持等）

第32条 受託者は、この委託事業に関して知り得た業務上の秘密をこの契約期間にかかわらず第三者に漏らしてはならない。

- 2 受託者は、委託者の許可なくしてこの委託事業に関する資料を転写し、又は第三者に閲覧若しくは貸出ししてはならない。

（個人情報に関する秘密保持等）

第33条 受託者及びこの委託事業に従事する者（従事した者を含む。以下「委託事業従事者」という。）は、この委託事業に関して知り得た個人情報（生存する個人に関する情報であつて、当該情報に含まれる氏名、生年月日その他の記述等により特定の個人を識別することができるもの（他の情報と容易に照合することができ、それにより特定の個人を識別することができることとなるものを含む。）をいう。以下同じ。）を委託事業の遂行に使用する以外に使用し、又は提供してはならない。

- 2 受託者及び委託事業従事者は、保有した個人情報の内容をみだりに他人に知らせ、又は不当な目的に利用してはならない。
- 3 前2項については、この委託事業が終了した後においても同様とする。

（個人情報の複製等の制限）

第34条 受託者は、委託事業を行うために保有した個人情報について、毀損等に備え重複して保存する場合又は個人情報を送信先と共有しなければ委託事業の目的を達成することができない場合以外には、複製、送信、送付又は持ち出しをしてはならない。

（個人情報の漏えい等の事案の発生時における対応）

第35条 受託者は、委託事業を行うために保有した個人情報について、漏えい等安全確保の上で問題となる事案を把握した場合には、直ちに被害の拡大防止等のため必要な措置を講ずるとともに、委託者に事案が発生した旨、被害状況、復旧等の措置及び本人への対応等について直ちに報告しなければならない。

（委託事業終了時における個人情報の消去及び媒体の返却）

第36条 受託者は、委託事業が終了したときは、この委託事業において保有した各種媒体に保管されている個人情報については、直ちに復元又は判読不可能な方法により情報の消去又は廃棄を行うとともに、委託者より提供された個人情報については、返却しなければならない。

(再委託の条件)

第37条 受託者は、委託者の承認を受け、この委託事業を第三者に再委託する場合は、個人情報
報の取扱いに関して必要かつ適切な監督を行い、前四条に規定する委託者に対する義務
を当該第三者に約させなければならない。

(事業実施に係る外部手続き等)

第38条 本事業実施に係る関係官公庁への手続きや、地元関係者との交渉等については別添共
通仕様書 1.12「関係官公庁への手続き等」及び、1.13「地元関係者との交渉等」のとおり
とする。

(事業実施に係る土地への立ち入り等)

第39条 本事業実施に係る国有地、公有地、私有地への立ち入りや利用については共通仕様書
1.14「土地への立ち入り等」のとおりとする。

(関係法令及び条例の遵守)

第40条 受託者は、事業の実施にあたり共通仕様書 1.16「関係法令及び条例の遵守」に掲げる
関係諸法令及び条例等を遵守しなければならない。

(一般的損害)

第41条 この契約の履行に関して生じた一切の人的及び物的損害については、受託者がこれを
負担するものとする。ただし、委託者の責に帰すべき事由による損害又はこの契約で他
に別段の定めをした場合の損害については、この限りでない。

2 天災その他の不可抗力によって生じた損害については、双方協議のうえ、その負担額
を定めるものとする。

(第三者への損害)

第42条 受託者は、この契約の履行に当たって第三者に損害を及ぼしたときは、その賠償の責
を負うものとする。委託者の責に帰すべき事由による場合はこの限りでない。

(契約不適合責任)

第43条 委託者は、引き渡された事業の目的物が種類、品質又は数量に関して契約の内容に適
合しないものであるときは、受託者に対し、目的物の修補又は代替物の引渡しによる履
行の追完を請求することができる。ただし、その履行の追完に過分の費用を要するとき
は、委託者は履行の追完を請求することはできない。

2 前項の場合において、受託者は、委託者に不相当な負担を課するものでないときは、
委託者が請求した方法と異なる方法による履行の追完をすることができる。

3 第1項の場合において、委託者が相当の期間を定めて履行の追完の催告をし、その期
間内に履行の追完がないときは、委託者は、その不適合の程度に応じて代金の減額を請
求することができる。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合は、催告をすること
なく、直ちに代金の減額を請求することができる。

(1) 履行の追完が不能であるとき。

- (2) 受託者が履行の追完を拒絶する意思を明確に表示したとき。
- (3) 事業の目的物の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行しなければ契約をした目的を達することができない場合において、受託者が履行の追完をしないでその時期を経過したとき。
- (4) 前3号に掲げる場合のほか、委託者がこの項の規定による催告をしても履行の追完を受ける見込みがないことが明らかであるとき。

(成果物の使用等)

第44条 受託者は、委託者の承諾のもと単独または他者と共同で成果物を発表することができる。ただし、本契約書第27条に基づき、一切の著作者人格権を行使しないものとする。

(特許権等の使用)

第45条 受託者は、特許権、実用新案権、意匠権、商標権その他日本国の法令に基づき保護される第三者の権利（以下「特許権等」という。）の対象となっている履行方法を使用するときは、その使用に関する一切の責任を負わなければならない。ただし、委託者がその履行方法を指定した場合において、設計図書に特許権等の対象である旨の明示がなく、かつ、受託者がその存在を知らなかったときは、委託者は、受託者がその使用に関して要した費用を負担しなければならない。

(安全等の確保)

第46条 受託者は、共通仕様書 1.29「安全等の確保」に従い捕獲作業従事者並びに第三者の安全確保に努めなければならない。また、本事業実施に係る安全連絡体制を定めた安全管理規定を作成し、事業計画書とともに監督職員に提出しなければならない。

(保険加入の義務)

第47条 受託者は、雇用者等の雇用実態に応じて共通仕様書 1.34「保険加入の義務」(1)に掲げる保険に加入しなければならない。

- 2 受託者は、雇用者等の業務に関して生じた負傷、疾病、死亡及びその他の事故に対して、責任を持って適正な補償をしなければならない。

(疑義の解決)

第48条 前各条のほか、この契約に関して疑義を生じた場合には、委託者と受託者とが協議の上、解決するものとする。

(その他の事項)

第49条 本契約書に記載のない事項については、共通仕様書のとおりとする。

上記の事業について、委託者と受託者は、各々の対等な立場における合意に基づいて、本契約書及び別添の「国有林野における有害鳥獣捕獲等事業の実施に係る共通仕様書」に基づき公正な委託契約を締結し、信義に従って誠実にこれを履行するものとする。

本契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

令和7年 月 日

委託者 群馬県前橋市岩神町 4-16-25
支出負担行為担当官
関東森林管理局長 松村 孝典 印

受託者 住 所
氏 名 印

令和7年度三国地区外有害鳥獣（ニホンジカ）誘引捕獲等委託事業

本特記仕様書は、「国有林野における有害鳥獣捕獲等事業の実施に係る共通仕様書」を補足し、本事業における固有の技術的要求、特別な事項を定めたものである。

特記仕様書

① ニホンジカ捕獲事業

1 事業の目的

近年のニホンジカ（以下、シカという。）の個体数の急激な増加に伴い、深刻化の一途をたどるシカによる森林被害への対策は喫緊の課題である。

このような中で、赤谷エリアにおいて現在はまだ低密度で生息していると推察されるシカの繁殖拡大の未然防止を図る観点から、本事業では、シカの捕獲等とともに、シカの行動経路を把握することを目的とする。

2 捕獲対象鳥獣及び目標捕獲頭数

ニホンジカ 30頭

3 事業区域

群馬県利根郡みなかみ町永井字三国国有林内外 305ha（別紙図面参照）

4 事業内容

本事業は、共通仕様書に定めるもののほか、（１）から（４）により実施するので、監督職員と事業開始時及び報告書作成時に打合せ等を行うこと。

（１）計画準備

ア 事業計画書の作成

共通仕様書1. 10の事業計画書の作成は、事業全体の推進・調整を図るため必要に応じて野生鳥獣被害対策に係る関係行政機関等と打合せ及び調整を行い関係者の意見を踏まえながら作成すること。

イ 有害鳥獣捕獲許可の申請等について

本事業を実施するための有害鳥獣捕獲許可申請は、受託者が作成のうえ、該当市町村長に申請し、捕獲作業実施前までに許可を得ること。

（２）捕獲方法

ア 実施概要

委託契約締結の翌日から令和7年11月28日（金）の間で、連続する30日を2回に分けて、くくりわなによる捕獲作業を実施する（捕獲・見回り・給餌による誘引作業・検体・メンテナンス・埋設含む）。第1回目、第2回目の開始時にくくり罠を30基設置する。また、第1回目、第2回目の終了時にはくくりわなを撤去する。また、第1回目と第2回目の開始後1週間は誘因期間とし、罠は稼働させない。

なお、目標頭数が捕獲できた時点で、実地作業は終了とし、ワナ等の撤去を行

うこと。

イ 実施時間

ワナの撤去、見回り、捕獲個体の処理等、現場での作業は原則として日の出から日の入りまでに行うこと。

ウ 実施箇所

事業区域において、事前に安全性を確認したうえで、委託者、受託者協議のうえ、適地を選定するものとする。

エ 捕獲方法

上記ウの実施箇所において、その後のメンテナンス、見回り、捕獲個体の処理、撤去等を実施する。

止めさしについては、安全確保に留意し、適正に実施すること。

カ ワナ・誘引剤の仕様

品名	規格	数量	納品等	事業終了後の返却場所
くくりわな	オリモ式 大物罠 0M-30型	60基	受託者が購入 (30基×2回分)	委託事業終了後、赤谷センターに返却。
誘引資材	鉋塩	1,050kg	受託者が購入 0.5kg×30箇所×70回	残がある場合は赤谷センターに返却。
誘因資材	ヘイキューブ	3,150kg	受託者が購入 1.5kg×30箇所×70回	残がある場合は赤谷センターに返却。
消石灰		60kg	受託者が購入 (1頭2kg) 30頭×2kg	残がある場合は赤谷センターに返却。

キ 捕獲実行体制

1日当たりの捕獲実行体制は、2名体制、車両1台を基本として実施する（捕獲・見回り・給餌による誘引作業・検体・メンテナンス・回収埋設含む）。

ク 捕獲体制における1日当たりの車両による林道等の移動距離は約12km（みなかみ町新治支所から現地まで）を想定する。

ケ 第1回目、第2回目の開始後は毎日見回りを行う。

コ 捕獲に係る整備

林道等の除雪作業など捕獲に係る整備は委託者と協議して行う。

(3) 捕獲作業の記録

ア 受託者は見回りを実施した誘引・捕獲状況について共通仕様書2.4.2(1)業

務日誌（日報）（様式仕1～2）を作成すること。

イ 業務日誌（日報）には、共通仕様書2. 4. 2（2）捕獲個体の記録写真及び下記の写真撮影基準（※）に基づいて捕獲写真を撮影し、添付すること。

ウ 捕獲が成功しなかった日は、見回り等の実施状況写真を添付すること。

エ 監督職員から業務日誌（日報）の提出を求められた場合には、速やかに提出すること。

※ 写真撮影基準

本事業により捕獲したシカを用いて、県及び市町村等が行う事業による奨励金を受けてはならないため、各奨励金の支給の証拠となる部位等にスプレーペンキするなどしたシカを、必要事項（捕獲事業体名、捕獲者名、捕獲日時、捕獲場所、事業名）を明記した看板を添え撮影すること。

（4）安全確保の体制

ア 猟具への標識設置

捕獲に使用する猟具に標識（住所及び氏名又は名称その他環境省令で定める事項）を装着し、捕獲作業を行うこと。

イ その他関係機関への説明等

捕獲の内容が決まり次第、県、関係市町、環境省等関係行政機関に対し説明を行い、必要な手続きを実施する。

ウ 腕章の着用等

従事者証を携行するとともに、所定の腕章を装着し実施する。

エ 当日の安全管理体制

当日の実施については、安全指導体制、実施体制、緊急連絡体制図等を作成し、事業従事者全員がそれぞれの役割を把握できるよう明文化して実施する。

なお、捕獲対象鳥獣に係る感染症やダニ等の危険性を熟知し、捕獲個体の処理作業時は、適した服装で行う。

オ 事業の中止

事業の全部又は一部の実行を一時中止する場合は、契約条項第14条に基づくほか、天候不良等により事業の実施が困難と受託者が判断した場合は、監督職員と協議のうえ、その日の事業を中止することができるものとする。この場合、業務日誌（日報）に中止の理由、監督職員との協議内容等を記載しておくものとする。

（5）捕獲個体の処理

ア 捕獲個体処理

回収した個体は検体作業（体長、年齢、雄雌別等）を行い、共通仕様書2. 4. 2（5）捕獲個体記録表（様式仕3）に記入すること。林内で処分する場合は所定の場所に埋設する。この場合の埋設箇所は委託者と協議のうえ、決定する。

イ 埋設穴の規格は、縦3 m×横7 m×深さ1. 5 m程度を基本とする。第1回目の

事業終了時に穴が満杯になってしまった場合、第2回目の事業開始時に同様の規格の埋設穴を設置する。

なお、埋設する箇所の現地状況によって、前述の規格の埋設穴を作設できない場合は、監督職員と協議のうえ、埋設穴の規格を変更することとする。

ウ 埋設穴設置に係る手続き及び掘削・埋め戻しについては、受託者が準備し施すこと。

エ 埋設に当たっては、クマ等の野生鳥獣による掘り起こし防止のため、捕獲個体1体につき2kgの消石灰を散布のうえ覆土するなど、掘り返し防止措置を受託者で施すこと。

オ 食肉の利用促進の観点から、自己負担により捕獲個体を食肉加工場へ持ち込むことを希望する場合は認めることとするが、関係法令等を遵守するなど適正な措置を講じて実施するとともに、委託者から食肉利用の実態等について問い合わせをした場合には情報を提供すること。

なお、食肉加工場からの対価は受け取ってはならない。

カ 受託者が当該事業における捕獲個体のジビエ利用を計画する場合は（様式4、5）により整理し、委託事業実績報告書とともに提出すること。

なお、共通仕様書3. 1. 6に基づき対価の授受は認めないものとするが、受託者が自費により加工施設等に運搬する場合に加工施設事業者等から運搬費用相当額を受け取る場合はこの限りではない。

（6）錯誤捕獲時の連絡・処理対応

事前に関係行政機関と調整し、連絡体制を整えておくこととし、錯誤捕獲が生じた場合は、連絡体制に則って対応すること。

錯誤捕獲に係る連絡及び処理費用は（実際の捕獲頭数に関わらず）受託者で負担するものとする。

（7）報告書の作成

上記4－（1）の事業計画書、（2）から（7）の捕獲・調査に係る一連の作業の実施結果、記録・写真、考察等について報告書を作成すること。

5 成果物

（1）提出物

紙媒体：報告書2部（A4サイズ、カラー）

電子媒体：報告書の電子データを収納したCD-RまたはDVD-Rを2部

（2）成果物に関する留意事項

成果物の作成に当たっては、「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律」（平成12年法律第100号）第6条第1項に基づき定められた「環境物品等の調達の推進に関する基本方針」に適合した製品を使用すること。

（3）納入期限及び納入場所

納入期限：令和8年2月27（金）

納入場所：関東森林管理局 赤谷森林ふれあい推進センター

6 著作権等の扱い

- (1) 成果物に関する著作権、著作隣接権、商標権、商品化権、意匠権及び所有権（以下「著作権等」という。）は、関東森林管理局に帰属するものとする。
- (2) 受託者は、自ら制作・作成した著作物に対し、いかなる場合も著作権者人格権を行使しないものとする。
- (3) 成果物に含まれる受託者又は第三者が権利を有する著作物等（以下、「既存著作物」という。）の著作権等は、個々の著作権等に帰属するものとする。
- (4) 納入される成果物に既存著作物等が含まれる場合には、受託者が当該既存著作物の使用に必要な費用の負担及び使用許諾契約等に係る一切の手続を行うものとする。

7 事業の履行期限

契約締結の日から令和7年11月28日（金）まで

8 その他

(1) 一般的事項

- ア 受託者は、事業の進行状況を定期的に報告するほか、監督職員の求めに応じて報告するものとする。
- イ 事業目的を達成するために、監督職員は、進行状況に関して必要な指示を行えるものとし、受託者はこれに従うものとする。
- ウ 受託者は、本事業の実施にあたって、再委託を行う場合は、事前に監督職員と協議を行い、承認を得るものとする。
- エ 受託者は、事業により知り得た情報について、外部に漏らしてはならない。
- オ 事業の目的を達成するために、本仕様書に明示されていない事項で必要な作業が生じたときは、受託者は監督職員と協議を行うものとする。
- カ 委託者等がこれまで実施した生息状況把握調査等必要な調査の結果報告については、委託者より受託者に対して資料の貸与等を行う。

(2) 支払対象

本事業では、捕獲目標頭数を定めるものの捕獲実績による支給ではなく、捕獲事業に要した費用について支給する。ただし、4の(4)のオにより事業の一時中止を行った日以外で、正当な理由なくして事業を行わなかった日については減額の対象とし、その日数に応じて双方協議のうえ、決定するものとする。

(3) 他の事業との関連

捕獲及び処分については、他事業との重複はできない。（本事業で捕獲したシカを用いて国、県等が交付する捕獲交付金を受領してはならない。）

(4) 委託事業における人件費の算定等の適正化について

受託者は、別添「委託事業における人件費の精算等の適正化について」に基づき、委託事業に係る人件費を算出するとともに、人件費明細書を作成し、直接作業時間を確認することができる書類を整備しなければならない。

なお、人件費明細書及び直接作業時間を確認することができる書類（別紙様式 12、13）については、検査の際に提示しなければならない。

（５）CSF対策

CSF(豚熱)の感染拡大防止のため、新潟県におけるCSF対策を熟知して適切な対策に努めること。

② 哺乳類モニタリング調査

1 事業の目的

調査対象地域における生物多様性を把握するため、多様な林相、地形・地況に応じた野生動物の生息状況と生息域における森林利用状況を把握し、野生動物の生息分布を明らかにするため、以下の調査等を実施するものとする。

なお、調査箇所等については、別紙のとおり。

2 事業区域

群馬県利根郡みなかみ町相俣大源田外2国有林内外（別紙図面参照）

3 事業内容

（１）センサーカメラによる生息・生態調査

現在、51箇所を設置しているセンサーカメラの状態を確認し、交換が必要と判断した場合は受託者負担により以下の物品を交換する。

品名	規格	数量	納品等	事業終了後の返却場所
センサーカメラ	TREL	3台	受託者が購入 (セキュリティセット)	事業終了後、返却時に指定
SDカード	64GB	3個	受託者が購入	事業終了後、赤谷センターへ返却
電池	単3電池	31個	受託者が購入	事業終了後、赤谷センターへ返却

（２）ニホンジカによる森林への影響調査

ニホンジカによる植生被害に対する予防的対策を検討するため、摂食状況と経年変化を把握することを目的に、以下の（ア）～（イ）の調査及び分析を実施するものとする。

（ア）上記アのセンサーカメラ設置地点（51地点）周辺において、半径10mの円形プロットを設定し、ニホンジカ影響簡易チェックシート（別紙3）による簡易摂食調査を実施する。

（イ）防鹿柵を設置し植生の変移を確認するため、定点調査地点に設定した4カ所のプロットについて、防鹿柵内（プロット3,5）2箇所と、防鹿柵外（プロット4,6）

2 箇所における摂食比較調査及び分析を実施する。

(3) 報告書の作成

事業計画書(①ニホンジカ捕獲事業と共通でも可)、(1)から(2)のモニタリング調査に係る一連の作業の実施結果、記録・写真、考察等について報告書を作成すること。

4 事業の履行期限

契約締結の日から令和7年11月28日(金)まで

5 成果物

(1) 提出物

紙媒体：報告書2部(A4サイズ、カラー)

電子媒体：報告書の電子データを収納したCD-R または DVD-R を2部

(2) 成果物に関する留意事項

成果物の作成に当たっては、「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律」(平成12年法律第100号)第6条第1項に基づき定められた「環境物品等の調達の推進に関する基本方針」に適合した製品を使用すること。

(3) 納入期限及び納入場所

納入期限：令和8年2月27日(金)

納入場所：関東森林管理局 赤谷森林ふれあい推進センター

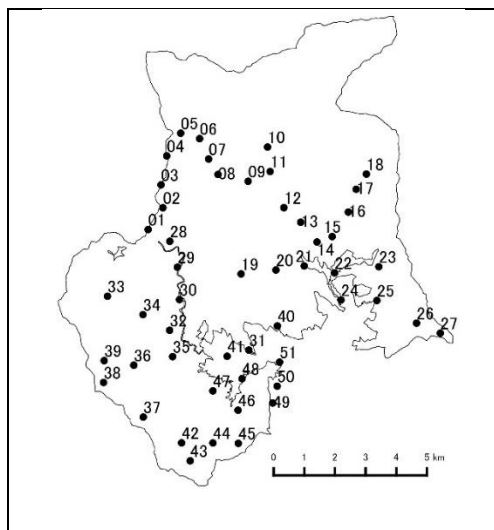
哺乳類モニタリング調査

1. センサーカメラによる生息・生態調査及び分析・評価

<調査・解析手法>

本調査は、平成 20 年度～令和6年度にかけて実施された調査と同一の 51 箇所にセンサーカメラ 51 台を設置し、継続的なモニタリングを実施する。

解析に当たっては、これまでの事業と同様の手法(撮影頻度指標 RAI)を用いて、夏季(8～9月)、秋季(10～11月)の2期間を対象として実施し、平成 20 年度から続く既存の調査結果との比較分析を実施する。



<撮影頻度指標 RAI とは>

センサーカメラによる調査では、個体識別が困難で、個体数の算出が難しいため、撮影頻度の比較により、相対的に種の増減の把握に努める。

ここでは、各種同一地点において、30 分以上離れた撮影のみを採用し(塚田ら 2006)、複数確認された場合は、1 撮影あたり最大頭数の個体数を用いて種ごとに集計し、100 カメラ稼働日あたりの個体数を撮影頻度指数(RAI)として算出する。

図 1. センサーカメラ設置箇所

2. 51 地点におけるニホンジカの簡易摂食調査及び詳細摂食調査及び分析・評価

<調査・解析手法>

赤谷プロジェクトエリア全域における、ニホンジカの摂食状況とその経年変化を把握するために、平成 20 年度からカメラトラップ・モニタリングを実施している赤谷全域 51 地点(図 1)ごとに設置している調査プロット(図 2)において、2 種類の摂食状況調査(詳細摂食調査及び簡易摂食調査(表 1))を 10 月に実施する。なお、簡易調査実施の際には、ニホンジカ影響簡易チェックシート(表 2)を用いて調査を実施する。

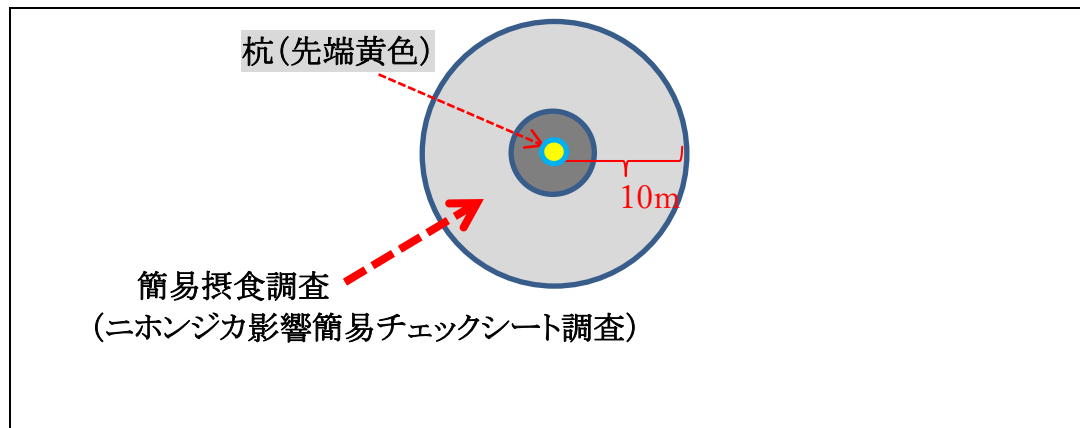


図 2. 永久調査区

表 1. 調査内容

簡易摂食調査
■調査内容 ・剥皮の程度 ・枝葉摂食の程度 ・下層植生の種類 ・ササの高さ ・下層植生量 ・不嗜好性による単相化 ・土壌流出 ・ディアライン等 ※詳細は表 2 参照
■調査範囲: 半径 10m 円形プロット

ニホンジカ影響簡易チェックシート

ニホンジカ影響簡易チェックシート Ver3						調査者	
1 場所の 情報	日時:	年 月 日			地点No		
	場所:	国有林 林型 小間					
	傾斜: (該当番号に○)	① 平坦～10°	② 10～30°	③ 30°～			
	森林タイプ (該当番号に○)	① 人工林 → 樹種 (1) スギ (2) ヒノキ (3) アカマツ (4) カラマツ (5) その他針葉樹 (6) 広葉樹 ② 天然林 → 樹種 (1) 広葉樹 (2) 針広混交林 (3) 針葉樹					
	上層木の平均胸高直径:	cm (目測で10cm読み)					
2 植物への 影響	【2-1. 立木(高さ2m以上)又は植栽地】						
	剥皮の程度: 1個体でもあれば (該当番号に○)	① 0%	② 1～10%	③ 10～30%	④ 30%以上		
	(注1) 新しい剥皮の有無: (該当番号に○)	① なし		② あり			
	(注2) 1.剥皮箇所がみずみずしい 2.剥皮箇所の外側の剥皮が内側に巻き込んでいない						
	枝葉摂食の 程度 (人工林のみ記入) (該当番号に○)	(↓高さ2m未満の植栽地の場合のみこちらも記入)					
	枝葉の摂食: (該当番号に○)	① 0%	② 1～10%	③ 10～30%	④ 30%以上		
	【2-2. 下層植生(自然に生えてきた2m未満の植物)】						
	下層植生の種類: (一番多いものに○)	① ササ	② ササ(枯)	③ 草本	④ 木本	⑤ なし	⑥ なし (表土流出の発生がみられる)
	(↓下層植生の種類がササ、ササ(枯)の場合のみこちらも記入)						
	ササの高さ: (該当番号に○)	① ひざより下	② ひざより上				
下層植生量: (該当番号に○)	① ほとんどなし 	② ある程度 	③ 豊富 				
原因について (該当番号に○)	① シカ食害	② 光量不足	① シカ食害	② 光量不足			
不嗜好性植物 による草花化 (該当番号に○)	① している	② していない					
3 その他	シカ糞: (該当番号に○)	① なし	② あり	③ 判別困難			
	シカ道: (該当番号に○)	① なし	② あり	③ 判別困難			
	シカ囁き声: (該当番号に○)	① なし	② あり				
4 総合診断	総合診断 (該当番号に○)	① なし	② 弱	③ 中	④ 強	⑤ 激甚	
	下層植生 (該当番号に○)	① 食痕全くなし	② 食痕僅か 度・種類とも正	③ 不嗜好性植物がやや優	④ 不嗜好性植物のみ	⑤ 裸地か、少数	
	樹皮剥ぎ (該当番号に○)	① 樹皮剥ぎ全くなし	② 樹皮剥ぎはほとんどなし	③ 一部の小苗で、軽微な樹皮剥ぎ	④ 樹皮剥ぎ小苗が多い	⑤ 小苗で50%超す被害	
	土壌流出 (該当番号に○)	① 下層植生被覆率50%以上	② 下層植生の被覆率30%未満、土壌・落葉流出あり	③ 下層植生被覆率50%未満、土壌・落葉流出あり	④ 土柱 ^(注) 等侵食痕あり、斜面のみ浸食	⑤ 腐植の薄層化(リリル ^(注) あり、深層にまで分多	
	ディアライン (該当番号に○)	① なし	② やや痕跡あり	③ 痕跡が観察される	④ 急斜面の法面にくっきり		
	自由記述						



※1土柱

※2リリル(小規模でも)

防鹿柵の内外においての比較調査及び分析・評価

<調査・解析手法>

平成 25 年度に設置されたシカプロット 3～6(このうち防鹿柵内 plot は 3,5、防鹿柵外は 4,6(図 3))において、10 月に種ごとの植被率・摂食率について調査を実施する。また、合わせて「51 地点におけるニホンジカの簡易摂食調査及び詳細摂食調査」と同じ手法で簡易摂食調査及び詳細摂食調査を実施する。

調査にあたっての各調査の調査範囲は図 3、図 4 に示すとおり。

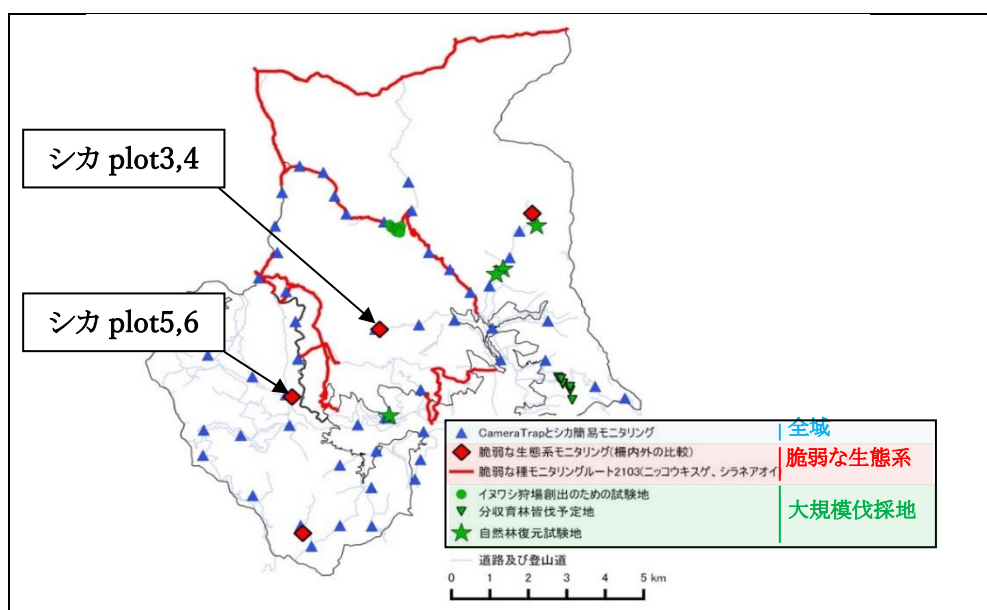


図 3. 調査位置図

簡易摂食調査
(ニホンジカ影響簡易
チェックシート調査)、
種別の植被率・摂食率
調査

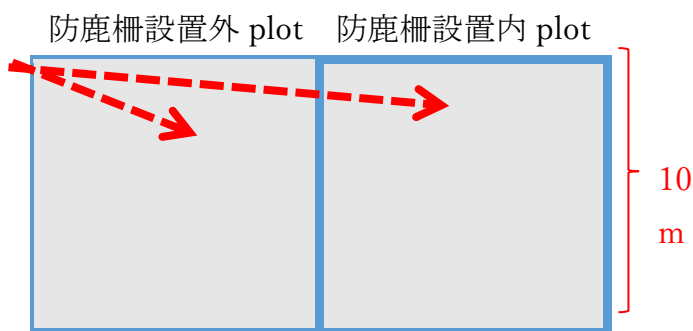


図 4. 各 plot の配置図

解析にあたっては、柵の内外の比較及び平成 25 年度～令和6年度のデータを比較することによって、ニホンジカの摂食の影響を評価する。